

茶色の靴

北 春海

もう十年くらい前になるだろうか。クリスマスモードに賑わう十二月、亡き主人の墓参りしたく札幌まで寝台特急「北斗星一号」に娘を連れて乗り込んだ時のことである。

上野を夕方四時に発車、終着駅札幌に明朝、九時に到着する長旅であった。夕方ということもあって向かいのホームは、電車を待つ人の数も多く都心の暗闇の空に鮮やかなネオンの灯りが賑やかに映っていた。段々と街々の灯りもなくなって列車も郊外に出ると、無人駅を次々と通過していく。誰もいない小さな駅の薄暗い照明灯だけがやけに寂しく暗い空間を強調していた。

——まもなく福島駅——と車内アナウンスがあった。ふと、まっくらな外を見ると雪が降っていた。国道を走るトラックの屋根に積もった雪の白さが街燈に照らされ走り過ぎていくのが見えた。随分、列車は北へ進んできたんだなあ——と思った。ちようどその時、食堂車開始のアナウンスが入った。今回の旅行の楽しみの一つに夕食を食堂車で摂ることだったので早速、娘と私はその車両に向かった。テーブルにつくと、窓際にスタンドが置いてありそのオレンジ色の照明が窓ガラスに映っていて、車両全体に高貴な雰囲気をもし出していた。

素適な時間をたっぷり味わって寝台に戻ると、私の向いのベッドのカーテンが引かれていた。床には茶系の男物の靴がきれいに揃えて置いてあった。私はその靴を見た瞬間！ この男性は一人旅が好きで几帳面な人かもしれない——と、なぜか理由は分からないが第六感というか、靈感というか、いずれにせよその印象が強烈に頭をかすめたのである。しかし、この鋭く痛いまでの直感がよもや、あの人！ だつたなんて誰が予想しただろうか、ましてや、十二月半ばといえれば列車も空席が目立つ状況の中で自分の目の前にその人がいるなんて！ 全く不思議な出会いであつ

た。

深夜二時——青函トンネルを通過中——と車内アナウンスの声がかすかに耳に入ってきた。すぐにまた浅い眠りについた。時計を見たら四時近くになっていた。私はベッドから離れ通路際に備えてある腰掛けに座って暗い外を見ていた。

時刻通り早朝四時、函館駅到着、朝とはいえこの時期の夜明けは遅い。黒っぽい厚手のコートを着込んで白い息を吐きながら列車に乗り込む数人の客が見えた。十分程度停車し再び動き出した。すると、向かいのベッドのカーテンを開ける音がした。私が振り向くとすでにベッドに腰かけていた男性の視線と私の視線が合ったので私は軽く会釈をした。私はベッドに戻りお互い向き合う格好となった。

やはり私の勘に狂いはなかった。年は四十少し過ぎ、眼鏡をかけた中肉中背の見たからに真面目そうなその人は、仙台から乗った、と言っていた。

私は外に目をやった。白々と日も差し始め家々のつららも一面のまっ白い雪も朝日に光り輝いて眩しいほどの風景を私は、一人楽しんでいた。すると、その人がポツリポツリと話し始めてきた。——札幌に住んで十五年になること、それまでには東京に十四年住んでいた事、そして今現在、広い家に一人のんびりと暮らしていることなど——私のほうから何も尋ねていないのになぜか、自ら静かな口調で話しかけていた。ちよつと不思議なこの空気は一体、何だろうと不可解ではあったが、単なる旅は道連れ、という意味合いから生じたのだと思い、深くこだわることはいなかった。が、少々妙な気持ちになったのである。その人とは全く無関係ではないよな気がしてきたのである。視線はどんどん走り去っていく外の風景を見てはいたが、私の頭の中では目の前にいるその乗客のことが気掛かりだった。そんな私に札幌へいく目的を尋ねてきたのである。墓参りであることを告げると、「初めて？」と少し躊躇気味に聞き返してきたのである。

その人とは全く面識もなく全くの赤の他人である私に——お墓参りは初めて？——と聞くこと自体普通一般的にあり得ないので私は更にこの男性と過去において関わったことがあるのではないだろうか、深くこだわらなくなったのである。そう思ったせいから、私はふと、男性の静かな話しぶり、ま四角な顔立ち、背格好、年齢的なことから、ある人を思い出したのである。それはかつて、私は亡き主人と小さな宿を営んでいたことがあり、その年の暮れの三十一日から元旦にかけて夫を交えてその男性と数人の客が夜遅くまでお酒をのんでいたことがあった。そのときの

人に似てきたように思われたのである。

当時、泊りに来た頃、二十代半ばくらいであって目の前にいるその人がその本人であるなら二十年ぶりの再会となる訳である。が、しかしだ、私はこんなことがある筈がない！ と、車窓を流れる景色に目をむけたまま頑なにその疑いを追及していた。空席の目立つ客の少ないこの時期、同じ列車の同じ車両の、しかも、四人用寝台ルームの私と同じ下段ベッド、こんな偶然以上の出会いがある訳がない！ 単なる似た人に出会っただけのこと、いや！ それとも紛れのない現実なのだろうか？ 旅の楽しさも忘れ家に居る息子や実母のことも忘れ私の頭の中はそのことばかり。本人であるかを確かめれば事は即解決することだし、もしその人ならば懐かしさで話に花が咲くというものを、でも私にはどうしても確かめる勇気がなかったのである。なぜなら、私はずっと長いこと自責の念にかられていたからである。それは、もう二十年も前になるだろうか、色々な事情から私は夫と話し合いの上別れその二年後の年の瀬も押し迫った日、私のいない宿に泊りに来た客と深夜遅くまでお酒を飲みすぎたのか、翌朝、脳内出血で倒れ、数日後夫はかえらぬ人となったのである。——もし分かれていなかったら——そんな後悔の思いがトゲのように今日の今日まで胸の奥に刺さったまま私は二十数年を過ごしてきたし、一度も墓参りすることのなかったことへのうしろめたい思いがずっと消えることなくしこりとなっていたからである。罪の意識があるが故に、私は目の前の乗客にあの日泊まりの来た人であるかないかを尋ねる、という勇気はどうしてもわいてこなかったのだ。これは私の勝手な推測であるが、その後、誰もいない我が宿に何も知らないままおとずれただろうその人は、おそらく近所の人から事実を知らされ亡き夫への哀れさに痛い程までの衝撃を受けたのではないだろうか。ある意味私を責めているにちがいないという思いが強く私の心を臆病にしているのでどうしても聞き出すことができないのであった。とは言うものの本当のことを知りたかったので勇気を振り絞って「あのーもしかししたら……」と言いかけた瞬間、それまで一点の曇りのない目をしていた彼の瞳が眼鏡の奥で一転にわかに曇り顔が強張り私を拒んでいるような表情に変わったのである。このことは何を意味していたのか今も分からないが、もしかすると私に対する小さな憎しみではないだろうか。

列車は海岸線を離れ内陸部へと走っていた。目の前の乗客のことばかり考えてい

たので、自分の時計が一時間も遅く止まっていたことも、又、列車が間もなく到着することも気付かなかったのである。私はベッドの上に散らかっている荷を慌ててカバンに詰め込んでいた。その人は先に車内を出て行った。出る様子も分からないまま、後姿を見ることなく別れてしまったのである。

もしかすると、その人の写真があるかもしれないと思い帰宅後、何冊ものアルバムをめくったところ、たった一枚だけあった！ 宿の玄関の前で、幼い娘をだっこした私をまん中に五歳くらいだった息子が隣りに、一方の隣りに眼鏡をかけた彼が写っていたのである。

私は上野から男性は仙台から同じ「北斗星一号」に乗車し、私の真向いのベッドでおよそ二十年ぶりにその人と出会う、こんな出来事を誰が予測したであろうか。私達は出会うべくして出会ったのである。初めて訪ねるお寺までの交通機関も道順も全く知らない私達にその男性は偶然にもお寺を知っていた為、無事にお線香をあげることができたのである。おそらくこの出会いは夫のお導き、と今も確信している。ともすると、その男性は早々に私であることに気付いていた上で語っていたのかもしれない。そうだとすると、彼も自分の身を明かそうとはしなかったのはなぜだったのだろう。今にして思うと自分もはっきり聞いてみれば良かったと後悔している。その人の名もずっとあとになってから思い出したのである。